

日本遺伝学会第 97 回神戸大会を終えて

大会委員長 菅澤 薫

日本遺伝学会第 97 回大会は、令和 7 年 9 月 10 日～12 日の期間、神戸大学六甲台第 2 キャンパスを主会場として開催されました。キャンパス内で会場がやや分散していたため、残暑が厳しい中、参加者の皆様にはご不便をおかけいたしました。心配していた雨の影響もほとんどなく、3 日間の会期を終えることができました。

本大会には国内外より計 399 名と、大変多くの方の参加をいただきました。内訳は一般会員 157 名、学生会員 150 名、シニア・教育会員 13 名、非会員（一般）26 名、非会員（招待）53 名で、特に学生の参加が大変多かったのが特徴です。博士前期課程以下を対象とするポスター発表が 75 件と大幅に増え、そのため大会の参加・演題登録にあたって新規に入会手続きをした学生会員が多かったと聞いております。学会の会員数増加に貢献するとともに、多くの若手研究者の参加によって活気あふれる充実した大会になったことを喜ばしく感じております。

本大会のプログラム編成にあたっては、シンポジウム・ワークショップ、一般口頭発表、ポスター発表、学会主催のフォーラム・ワークショップの時間帯をそれぞれ明確に分けるように配慮いたしました。これにより、シンポジウムやワークショップと並行して行われる他のプログラム、特に一般口頭発表やポスター発表に聴衆が集まらないという状況を避けることができ、結果として会期を通じて各会場で活発な議論が展開されることにつながったものと思います。一方で、大会 1 日目、2 日目午前の一般口頭発表は、総演題数 113 件とほぼ例年並みでしたが、スケジュールがかなりタイトと感じられたかもしれません。今後、演題数が大幅に増加すると同様のプログラムが組めるかどうかわかりませんが、次回以降の大会運営のご参考になればと思います。

今回、参加者の皆さんは会場の受付に到着された際、神戸大学百年記念館から見下ろす神戸の街並みと大阪湾の眺めに驚かれたのではないのでしょうか？ 大会 1 日目のナイトゼミナールでは六甲台第 1 キャンパスの食堂を会場として、もう一段高いところから神戸の夜景を眺めていただき、2 日目の懇親会は一転して神戸港の突端にある会場から海の景色を楽しんでいただけるように配慮いたしました。それぞれの会場の場所がややわかりにくい、移動に時間がかかるといった点でご不便をおかけしたかと思いますが、参加者同士の交流促進という本来の目的に加えて、学問以外の部分でも神戸の魅力を存分に堪能していただければ幸いです。

大会最終日翌日（9 月 13 日）の公開市民講座は、「遺伝学が拓く古代生物の世界」というテーマで開催されました。ハイブリッド形式で行い、神戸大学百年記念館（六甲ホール）での現地参加 104 名、オンライン参加 40 名、計 144 名という多くの方に参加していただきました。4 名の講師に、イヌの進化の道のり、日本人の遺伝構造、マンモス復活計画、恐竜研究の現状について、それぞれの最先端の研究内容をわかりやすく解説していただきました。古代生物という、誰もが興味を抱くテーマ設定だったこともあり、多くの参加者から質問が寄せ

られ、終始和やかな雰囲気活気に満ちた市民講座となりました。高校生以下の若い参加者が想定よりも少なかったのはやや意外でしたが、これを機会に遺伝学、生物学の研究に興味を持ち、将来の研究者を目指す人が少しでも現れてくれることを願っています。

最後に、本大会の開催にあたっては大変多くの方にご協力をいただきました。大会の実行委員をお願いした神戸大学所属の学会員の先生方には、それぞれのご担当で多大なご尽力をいただきましたし、大会当日の会場運営が大過なく、円滑に進められたのは関係研究室のスタッフや学生さんたちのおかげです。また、角谷会長はじめ、日本遺伝学会の事務局や幹事の皆様、シンポジウム・ワークショップの世話人や座長の先生方には、諸々の事務手続き、プログラムの企画・編成などで本当にお世話になりました。運営全般をサポートしていただいた大会事務局の皆様、資金面でご支援いただいた諸団体・企業様、そして本大会を盛り上げてくださったすべての参加者の皆様に改めて深く感謝申し上げます。本大会が、微力ながら日本遺伝学会の今後の発展の一助となることを心より願っております。